

ふり返りつつ昔を見ようか

— 第一次から二十年の

ちいさな不備な

追加資料抜き書き集

発端を書いたもの

(1) 一つのルポルタージュ

— ささやかな動乱は一老人の死によってしか誘発されなかった……

二十年前、一九六一年、昭和なら三六年の釜の暴動について、こう書きはじめたルポルタージュがある。

書いたのは、次のような人物だ。

— 大阪本町のオフィス街にある小さな詐欺屋の事務所に勤めているわたし……

このわたしが、連夜釜へきて、彼のいうささやかな動乱に対して、ヨソモノの単なる野次馬よりは十分に身を乗り出した心情で「参加」した見聞を半年後の雑誌に発

表したのである。

釜の最初の暴動については、すでに私たちの「労務者渡世」は、訓刊号から「資料・第一次釜ヶ崎暴動」を連載した。大まかに見て、蜂起・原因篇／蜂起・昂揚篇／蜂起・流血篇／蜂起・終熄篇／鎮圧篇および行政篇にわかれたこの岩田秀一の労作は、事件当時の各新聞をくわしく調べて構成したとび切りのいい資料だ。

それで二十周年という今年は、ひとまずその岩田編「資料」を別にして、事件をふり返る手がかりをいくつか提供することにした。もちろん主題は「第一次」だが、かならずしもそれに限定せず、また範圍を山谷にもひろげたりしながらである。

しかし、別にしてといったすぐあとだが、まず岩田編「資料」によって亡くなった人の名をはっきりさせておこう。

その人の名は柳田豊造さん、六十二歳だった。

タクシーにはねられたのは二十年前の八月一日午後九時五分頃、場所は国電新今宮駅東口を出たらすぐ右に見える広い交差点の東南側、いまはなくなった西成署派出所の前だ。

柳田さんの事故に対する警察の取扱いの不当さが暴動の原因になったことは、もはや歴史に明記されたことだからここではもう言わない。

— 老人の死などどうでもよくなるのには一時間という時間を必要としなかった……

— だれかがはじめて石を投げた。これは英雄と呼んでいい行為だろう。二人めが投げた。これは勇気と呼んでいい。三人めが投げた。これが野次馬。その後の無数の投石は政治。この地帯の住人は自らの感情を政治に転じて押し広めていった……

— かれらの体内に凝縮された恨みは、派出所の窓ガラス五、六枚でおさまるほど弱いものではなかった。かれらは動員された警官そのもの、警官が表出する権力そのものに向けて悪罵を投げた。闘いの次元は変った。

集ったすべての人がこのことを感じとったとき、その量は飛躍的に増加した……

— とりあえず東田町派出所を燃やせと要求する一群があったとしても、それは暴徒ではない。その証拠を望むなら降家に類焼するのを防いだのがだれであるかをあけるだけで充分だろう。それは火を（派出所に）放った当人たちだったことは明らかである……

ルポはこうして暴動の発端を書いている。

そうかいな、ちょっと書きすぎやないかいな、と思わせないくはないが、革命の前衛と称する政党に「見きりをつけて離党した」筆者としては、このように書くのが一番自分に忠実なことだったに相違ない。前年「六〇年」の安保改定反対闘争の盛り上りと挫折を心中にくすぶらせた者の、突如とした歓喜がよくわかる。

発端を書いたもの

(2) 一つの小説

この小説には戸村重吉という主人公が設定されている。六十歳、前科が七つか八つあって、七年の刑を高知刑務所でつとめ終えて釜へきたばかりと身の上はそうなっていて、三疊三百円のドヤに住んでいる。いまのところは

雷かずともヤマを踏まずともしのげる程度のカネはある。それから、さきのことわっておくのは、この小説が一九六二（昭和37）年十二月発行の雑誌に発表されたことだ。第一次暴動は前の年八月に起り、第二次は一九六三年五月である。つまり、一九六一第一次、一九六三第二次の中間の年に発表されたこの小説は第一次を素材にしている。しかもその発端を。

もちろん小説としては、現実には起ったことについての小説家の解釈や想像が加えられていても、それは当然であつてとがめ立てはできない。しかしこの小説には、作者が釜のすぐ隣りに住んでいるという特別な条件があるので、そこが小説としてウンヌンという以外の、こちらの見方、読み方になつてくる。

ではどんなふうにも小説を書いているか。

戸村重吉は釜のホルモン屋で出会った森田という男（やはり高知刑務所にいた）と組んでヤマを踏みかけたが、急に体調が崩れて失敗に終る。そして医者に見てもらう。——東田町の巡査派出所の横を入ると、出るのに迷うような路地が、四通八達している……

——上田親娘がここに診療所を開いたのは二十八年のクリスマスの日だつた……

小説はこう書いている。

れかれなしに噛みつきそうなのだ。人が多すぎた。路上に新聞紙をひろげてじろじろと寝た……

そういう日に、重吉はどうしたか。

——重吉は南海阪堺線のカシミ町駅附近の路上を、よろよろと歩いていった……

と小説は書いてある。

交差点をななめに渡れば診療所への路地に行けるわけだ、ところが小説家の考えたところにちがいない。が重吉は、もう自分の足で歩けないほど弱つていた。するとそんな重吉を若者二人が両方から助けて歩いた。実は助けたのではなく、酔っぱらいと思つてネライをつけた介抱盗なのだが、ともかくそのおかげで、重吉は上田診療所に近い派出所の近くまで運ばれて放り出された。アルバカの上衣が奪われたが、腹巻のカネは、ちらりと見えた刺青のせいで無事だ。しかし重吉はもう人事不省的な状態で幻覚に陥っている。

——釜が崎の路上で死ねたのなら覚悟のできていたことだ……

こんなことを重吉は思つた（ように小説には書いてあつて）、まわりに人が集つてきたのもわからない。そして場面は交番（派出所）に、人は警官に転換してしまふ。——警官は机に向つていた。書きものをしてるよう

東田町の派出所、柳田豊造さんがクルマにはねられたすぐそばの、いまはなくなつてしまつた派出所のことは前に出てきた。その横の路地にある上田診療所へ、戸村重吉は診てもらいに行くのである。この場所のきめ方、おそらくは架空の診療所の所在を小説家は考へてきめたのだらう。

診療所では上田親娘の娘の方が主役で、即ち医者である。父親は賀川豊彦に影響されたクリスチャンで上田友三という。娘は友子。

——釜が崎で、医者にかかれぬ人達のためにと、云いだしたのは（現役医師の）友子さんの方だつた／新制中学の校長をしていた友三さんの月給はかなりあつた／「薬代はわしが持つてやる、医療活動のいっさいはお前が無料奉仕しなさい」／この約束で始めた二人である……

戸村重吉はそこで診てもらつて、かなり進行している胃カイトウだと言われる。診察二日後にはどつと血を吐きもする。だが、一旦相棒になつた森田は二度目のヤマを促しにやってくる。重吉は病人のくせにあせる。そして「その日」になる。

——この四五日の暑さは、その毎日が、この夏最高の暑さだと、記録が新聞に書かれた。人はじつと家の中にいられなかつた（略）暑さに参つて、目をくぼまし、だ

であつたが、時々目をあげて前の国道を見た。前面の少ししか視野がとどかなかつた。疲労の色がありありとその顔に見られた／交番からは、重吉の倒れている場所までは見えなかつた。何かあつたのか、人だかりがひどくなりだした。その動きは見えだが、珍らしいことでもないから別に氣にとめていなかった……

そこへ焼酎のおいをさせた男が飛びこんできて死にかけてると見える重吉のことを告げた。男の調子と警官の対応は調子が合わなかつた。

——超過している勤務と、加重されている責任とで、汗みどろなのであつた。警官自身が冷静さを失つたとしても責めることはできない……

小説はこう書き、さらにつづけて次のように書いている。

——その押問答は瞬間のものだつた。男の声が調子外れに大きかつた。警官の腰のあげ方が、やつと動くんだと云ふ印象を与えた……

——口から口に伝わつて、騒ぎの大きくなるのは速かつた。警官に反省の時も、処置をどうするか、冷静な判断を下させるゆとりもくれなかつた。非難がいろいろの形で起つた。どれが真実なのか、何を騒ぐのか警官が事件の渦中にはまりこんで、一人の行路病者を死に至らし

坂×寛 昭和十五年生 暴 六月

並×鉄× 昭和八年生 公 六月

松×憲一× 昭和二年生 公 六月

うち七人が執行猶予三年、三人が控訴して保釈中、ほかに分離裁判一人というのが前記リストへの添え書きである。

暴力行為でも傷害でも、そんな罪名は捕まる側に投げ返すべきだし、そむいうことをするのが公務なのかどうかも怪しい。にもかかわらず、常に捕えられ裁かれるのは群衆のなかのまことにめぐり合わせの悪かった者たちなのだ。最年長の金×氏は生きていればもう八十歳の高齢になっている。

内部の見方、感じ方

(4) Q君の記録から

こんどは暴動に対する内部の見方、感じ方のようなところを出しておこうと思う。

それは各人各様、人の顔がそれぞれ別であるのと同じく別々なのが本当ではあるが、その一端ということで。

書きのこしてくれたのはまぎれもなく釜のニンゲンだった仮名Q君で、彼は国電から北側、浪速区の方のドヤ

に長いこといた。彼の文章のなかには、釜へきて二年間（一九六六年当時まで）の就労先や労働時間、賃金などの詳しいメモもあって、それも貴重な資料なのだがいまは省略する。

Q君は釜の第四次暴動、一九六六年五月二十八日のそれについて書いているのだ。

しかし紹介の前に、その暴動はどういうものだったか、一応新聞の要約を写そう。

——消防車の出動がおそいと約三千人があばれ、三日間つづいた。パチンコ店や警官詰所への放火や投石がつづき、一二〇人がけが、西成署の巡査がピストルを強奪された（朝日新聞一九六八年八月二三日）……

この暴動は府道尼平線の北側、丸松食堂のすぐ西にある将棋クラブだったかの出火さわぎから新聞記事がいうように発展し、群衆は南海阪堺・平野線の踏切をこえて大一パチンコ店へ向った。なぜそのような群衆の大移動、攻撃目標設定がスムーズにおこなわれたのかわからないが、誰も号令をかけはしないのに、移動または進軍は整々としていた。

あとの詳細はまだ語りつく人も多いことだからそれに譲って、現場労働者Q君が記録している内部の声を紹介しよう。